



鬘櫛山山頂 浦上芳啓氏撮影

すぐ北側にあり、裏山が苦編山である。

(新・姫路の町名) 播磨地名研究会編、より。(中島隆氏提供)

### 【コースタイム】

J R英賀保駅9・45―本徳寺(本願寺)10・00―苦編山10・58―初取山12・00―12・35―鬘櫛山12・44―琴丘高校13・00―灘菊酒造

### 【参加者】

須磨岡輯 中島隆 新本政子  
岩崎しのぶ 浦上芳啓 大塚宏  
大塚和子 柏木宏信 金井  
健二 金井良碩 清瀬祐司 久  
米久夫 小林京子 阪下幸一  
阪下悦子 先水美智子 戸島泰  
三郎 瀧由喜子 中谷絹子 秦  
康夫 前田正彰 松波幹夫 宗  
實慶子 山内幸子  
【非会員】  
石田幸弘 柏木純子 兼子衣代  
岐部明弘 小林優子  
5名計29名

## 「チョゴリザ初登頂50周年記念シンポジウム」に参加して

井上達男

「パイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエ

ンス」をテーマに2008年11月3日、京都大学芝蘭会館稲盛

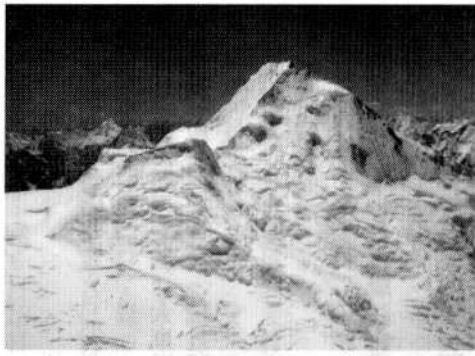
ホールにて京都大学学士山岳会(AACK)主催の標記「チョゴリザ初登頂50周年記念シンポジウム」が開催された。多くの京都大学関係者はもちろん宮下秀樹JAC会長、重廣恒夫JAC関西支部長、塚本珪一JAC京都支部長等に加えて広く東北、関東、九州方面の山岳界から多数の出席があり、総勢120名を越える盛大な会であった。1958年は桑原武夫氏率いるAACK遠征隊がカラコルムの処女峰チョゴリザ(7654m)の初登頂に成功した年であり、今西錦司氏がアフリカで類人猿の学術調査を開始した年、西堀栄三郎氏らが初めて南極越冬に成功した年であった。その後、ヒマラヤ、南極、アフリカなどでAACK会員の多くがパイオニアワークを実践、多数人材を育成し、新しい学問のフィールドに果敢に挑んでいる。わが国の登山・探検・フィールドサイエンスにおいてその先駆的な役割を果たしてきたことは広く認められていることである。50周年を機会にそれらの活動を振り返り、次の進むべき道を論議しようという趣旨でシンポジウムが開催された。

「気候変化とヒマラヤの氷河」藤田耕史氏(名古屋大学准教授)は昨今のヒマラヤの氷河後退を観測から得られた結果より報告。ヒマラヤでは氷河の融解がない冬に温暖化しており、夏には顕著な温暖化は見られない。氷河の縮小は降雨量が減っているからだ。降雨量の減少の原因は解らないなど、単純に地球温暖化すなわち氷河の縮小とはならないことを示された。

「高所医学からフィールド医学へ」松林公蔵氏(京都大学教授)は高所医学から発展して、高知県の香北町において、高齢者の健康維持、介護予防に関する地域介入研究を約15年にわたって継続している取り組みを解り易く解説。シンポジウム参加者の多くが高齢世代であり、大いに参考になったと思われる。

「南極初越冬とその後の50年」横山宏太郎氏(農業・食品産業技術総合研究機構)は、昨今の様変わりした近代的な越冬隊と初期の苦勞がうかがえる古い写真でその差異と発展を示された。

「アフリカの森とチンパンジー研究の未来」松沢哲郎氏(京都大学教授)は、「アイちゃん」の子供たちが1から9までの数字



バルトカンリからのチョゴリザ 芝浦工大提供

をモニター画面でバラバラに配置したものを二、三秒見せた後にその数字を白く塗りつぶしても順番に指でなぞって見事におやつを取り出す様子をビデオで示し、チンパンジーが人間より優れた面があることを比較認知科学的視点から観察した結果を聴衆に知らしめた。

「雪氷生物学から野生動物研究へ」幸島司郎氏（京都大学教授）は、雪の上をこそ歩き回っている雪虫の研究から氷河に住む昆虫やミジンコを世界で初めて発見し、氷河にも生態系があることを明らかにした。各地の氷河生態系を調査し、その特性や地球規模の環境変動に対

する影響について発表。また、イルカやオランウータン、サイ、オオカミなど様々な生物の生態や行動の新しい発見を発表。

最後に平井一正氏（神戸大学名誉教授）が「チョゴリザ登頂から50年―未知への情熱を育てた京大山岳部の土壌」と題してそのよき伝統と文化継承の必要性をまとめとされた。いずれの講演者も京都大学山岳部の出身者であるが、講演内容が深く新鮮で、それぞれもう一度じっくり聞きたいと思わせるものであった。

このシンポジウムの強力な推進者はチョゴリザ初登頂者である平井一正氏である。チョゴリザと言えば「花嫁の峰」と呼ばれるように美しい山容とともに1957年に頂上アタックを悪天候のために引き返す途中、稜線にて行方不明となった超人、ヘルマン・プールの名前が思い出される。1958年、AAC Kチョゴリザ遠征時にそのキャンプが発見され遺品を回収、それがイタリア隊に託されてプー尔夫夫人の元に届けられた。平井一正氏は2008年秋、南ドイツのラムソウにてハウス・ヘルマン・プールというペンション

を今なお経営されているプー尔夫夫人を訪問、プールと共にチョゴリザに挑戦したクルト・ディームベルガーを交えて50年ぶりの邂逅のひとつを過ごしている。（JAC会報「山」2008年10月、No.761に記事有）シンポジウムにそえる一つのエピソードであるが、このために渡欧された熱意にも感服する。

昨今はヒマラヤの処女峰登山や、パイオニアワークの時代はもう終わつたと言われている。特に大学山岳部は部員数減少が顕著である。新しい課題を提示して登山の魅力を再び取り戻すことがヒマラヤ7000m処女峰初登頂時代を謳歌した世代の責務ではないだろうか。たとえばチベットの広範囲に渡って存在する数多くの6000m級処女峰の登山が一つの新しい方向だと考えられる。これらの山々は険しい山容のものが多く、より困難な登山を強いられよう。

このたびAAC Kの輝かしい歴史と現在の活躍の一端に触れ、それを賞賛する一方、その影に悲しい遭難の歴史も併せ持っていることを思い出し、これからの課題を考えつつシンポジウム後の宴を後にした。

後

#### ◆第4回委員会議事録

2008年11月20日（水）

大阪セルロイド会館3F会議室

参加者 重廣 金井良 川戸

宗實 中島 阪下 先水 柏木

斧田 中谷 大津 辻 山内

廣田 鹿田 久保

以上16名

司会進行 金井良

支部長あいさつ・コメント

1 「四国分水嶺踏査」について

最終回・報告会および懇親会

四国のメンバーと連携を取る

報告会会場と時間 徳島市 住

吉・城東コミュニティセンター

13時00分～15時00分

配付資料 山名リスト

2 「四国分水嶺踏査」報告書について

関西支部の実績として残す（報告文+α）

体裁と予算化―来年の総会に諮る

3 「近畿分水嶺踏査」について

来年からの分水嶺骨子作成の件

4 晩餐会の出席について

5 HP作成担当者および引継ぎ

担当者退会に伴い松波さんに引

継ぎ依頼

6 山行委員長について

委員長退会に伴い総会までの

委員退会に伴い総会までの